

真理と良心 —— ハイデッガー良心論の一考察

北河智美

はじめに

第一章 非覆蔵性としての真理——真理の段階

第一節 言明の真理と配慮の真理

第二節 現存在の「開示性」としての真理

第二章 プラトンの「洞窟の比喩」解釈

第三章 覚悟性と良心

第一節 非本来的真理と良心の呼び声——第一段階、第二段階が意味するもの

第二節 ハイデッガーによる「洞窟の比喩」解釈の特異性

第三節 本来的真理と良心の呼び声——第三段階が意味するもの

第四節 他者へのかかわりと真理——第四段階が意味するもの

はじめに

本稿では『存在と時間』における「良心 Gewissen」の問題を取り上げるが、とりわけ、ハイデッガーが、「覚悟した現存在」は「率先して模範を示しつつ・自由にする顧慮」というかたちで、「他者たちの『良心』になることができる」と述べていることの意義について明らかにしたい。

レーヴィットやトイニッセンは、しかし、この「率先して模範を示しつつ・自由にする顧慮」の意義については消極的で否定的な評価をくだしている。彼らによると、「率先して模範を示しつつ・自由にする顧慮」は、結局、他者を私の像に従って作られた自己へともたらすことになる。それゆえ、このような解放は、一方的に自由を押し付けるだけであり、他者に自由を与えようとすることによって、かえって他者からその固有な自由を奪ってしまい、または自由の実現を阻害するという結果になるというのである。¹⁾

これらの批判的意見に対しては、この顧慮は他者が自らの力で覚悟性に至ることを、あくまでも「手助け」するだけであり、それ以上ではないという立場からの反論はなされるが、それ以上に踏み込んで言及されることは少なく、「率先して模範を示しつつ・自由にする顧慮」における「手助け」という他者への働きかけがどのような意味を持つかということは、あまり重視されてこなかったように思われる。²⁾

ハイデッガーの他者論³⁾について考える際、「良心」が最も重要な概念であると思われるが、周知のとおり、真理と良心は根本的に深く結びついている。そこで、以下では『真理の本質について』の中で行われている、プラトンの「洞窟の比喻」についての解釈の考察をふまえつつ、「率先して模範を示しつつ・自由にする顧慮」における「手助け」の働きが、ハイデッガーの他者論において重要な意味を持つことを示したい。

第一章 非覆蔵性としての真理―真理の段階

ハイデッガーの真理概念は、「非覆蔵性 (Unverborgenheit)」として理解されているが、この非覆蔵性としての真理が、『存在と時間』の中では多様な形で述べられている。そこで、本章では、まず第四四節の記述を中心に簡単に整理しておきたい。⁴⁾

第一節 言明の真理と配慮の真理

例えば、「壁にかかった絵は斜めである」と言った場合、この言明が真であるかないかは言明する者が、壁に斜めに掛かっている絵を知覚することを通して明らかになる。つまり、そこでは、言明の「発見しつつあること」(das Entdeckend-sein) があらわになっており、存在者がどのように発見されているかが示される。それゆえ、言明の真であること(真理)は、その言明が存在者をそれ自身において発見することであり、発見しつつあることとして、理解されることになる。

また、世界内部的存在者の「発見」は、身近な存在者との交渉、つまり、道具の使用による。道具の使用に際してのある特有のまなざし、「配視 Unsicht」によって、「発見」が理解できるようになる。たとえば、「ハンマーの固有な『使いやすさ』を発見する」(69)という場合、この「発見すること」は、あるものを「隠蔽された状態」から引き出すことを言う。それゆえ、道具が有用性において使用されている場合に、その存在者は「発見されている」ということになる。このように、配視的な配慮、あるいは、立ち止まって注意深く見るという仕方での配慮は、世界内部的な存在者を発見し、この世界内部的存在者は発見されたものになるのである。

しかし、以上の言明の真理と配慮の真理に見られるような、「発見される」ということ、また「出会われる」とい

うことは、世界内部的存在者に関して言われる事態であり、このような被発見性としての真理は、現存在の開示性としての真理に基づいている(221)。それゆえ、発見存在としての現存在の開示性としての真理が問題となる。

第二節 現存在の「開示性 *Erschlossenheit*」としての真理

開示性は、現存在の根本のあり方である。それゆえ、「それ自身に先立って—ある世界の内にすでに存在し—世界内部的に存在するもののもとに存在すること」という「関心 *Sorge*」の構造は、それ自身の内に現存在の開示性を含んでいる。そして、「現 *Da*」の明るみの自己開示は被投的企投であり、それに従って、現存在の開示性は、さらに、「事実の開示性」と、最根源的真理としての「最根源的で本来的な開示性」とに区別されることになる。ハイデッガーの規定を簡単にまとめると以下の通りである。

まず、現存在の存在の体制には、被投性が属している。被投性の内では、現存在は、自分の現存在であるのと同じ時にその都度既にある特定の世界の中で、ある特定の世界内部的存在者の特定の範囲に存在しており、その端的な存在の事実性が開示されている。しかし、この段階では、現存在は本来的にも非本来的にもなりうるという可能性を持つので、ここでの開示性は、いわは非本来的開示性であるといえる。

さらに、現存在の存在体制には、企投が属している。現存在には、自己を「世界」と他者たちの方から理解するか、現存在の最も自己的な存在可能から理解しうるかという、二つの可能性が開かれている。後者の場合、現存在は自身に自己を最も自己的な存在可能において、最も自己的な存在可能として開示するということになる。最も自己的な存在可能において現存在が開示されるならば、この最も根源的で、最も本来的な開示性が「実存の真理」である。現存在の「本来性」という様態においてはじめて、「最も根源的な真理の現象」が獲得されることになる(221)。しかし、同時に現存在は常に頹落の傾向を持っている。差し当って大抵は、現存在はひとというあり方で、公開

的被解釈性の支配を受けて存在している。そこでは、存在者は、完全に隠されているのではなく、発見されてはい
るが、同時に、おしゃべりと好奇心とあいまい性を通して偽装され、覆蔵されており、「仮象の様相」(222)で示さ
れているに過ぎない。つまり、現存在は、被投的企投として、同時に頽落しており、その存在体制には、常に同時
に、覆蔵性つまり非真理が属していることになる。

以上、非覆蔵性としての真理を、言明の真理、配慮の真理、現存在の開示性としての真理というかたちで整理す
ることにより、現存在の開示性としての真理が、言明の真理と配慮の真理の前提となり、現存在の存在と現存在以
外の存在が開示されているという意味で、「最根源的な真理」(223)であるということが確認される。本稿において
は、「非覆蔵性」を可能にしている現存在の開示性としての真理が議論の主たる対象となる。そして、その際、先に
述べた非本来的開示性、および本来的開示性、そしてその開示性によって基礎づけられる被発見性としての真理の、
いわば三つの段階があることを考慮しつつ以下に検討したい。

まず、次章では、ハイデッガーの『真理の本質について』(一九三一年)におけるプラトンの「洞窟の比喩」解釈
と対比させることで、真理と良心の問題を考えたい。

第二章 プラトンの「洞窟の比喩」解釈

本章では、『存在と時間』の真理と良心の問題を考える上で、『真理の本質について』のプラトンの「洞窟の比喩」
解釈について簡単に整理する。

「洞窟の比喩」解釈部分では、人間の現存在の根拠をなすものとして、アレクシア(非覆蔵性)を考えること
が、その中核をなしており(GA34,10)、人間の内で、根源的に非覆蔵性をもたらすものを、「開蔵性 Entbergbarkeit」

(GA34,80)として、ハイデッガーは見ている。その意味で、『存在と時間』における開示性としての真理と良心の問題を考察するにあたって、『真理の本質について』における「洞窟の比喻」解釈を対比的に取り上げることには都合はないと思われる。『真理の本質について』の基本的視点は、真理と存在の連関を人間の現存在を媒介として開明することにあると言えるのである。⁽⁵⁾

では、「洞窟の比喻」において、人間と人間の現存在に属している非覆蔵性の関わりはどのように語られているのだろうか。ハイデッガーは、次のような四段階に区別し、それぞれの段階に即して語っている。

「ハイデッガーによる四つの段階」

第一段階 地下の洞窟における人間の状態

第二段階 洞窟の内部における人間の「解放」

第三段階 根源的な光への人間の本来的な解放

第四段階 洞窟への自由な者の帰還

まず、第一段階では、地下の洞窟内での人間の状態について述べられている。ここでは、囚人は壁に向かって体を固定されて、壁に映る影と反響する音以外には見聞きできない状態である。ここでは、束縛されている者は影を見ているが、しかし、存在するものの影としてではない。また、自己自身と他の共に束縛されている者の影しか、彼らは見ないので、彼らは全く自己自身への関わり合いを持たない。けれども、「束縛されている者たちは制作された物の影以外の何も非覆蔵的なものとみなさない」(GA34,25)という点が示すように、彼らにとっては、目の前の影が、非覆蔵的なもの(*to álθēs*)であり、それで十分なのである。

それゆえ、確かに、この段階での囚人達は、自己自身や他者たちへの関わり合いを持たず、影のみを知っているにすぎないような、「非覆蔵性の本質、そのものへのまなざしを意味する目配せ」ではないにしても、「この状態の内に何らかの仕方では非覆蔵性があることへの目配せ」(GA34,28)があり、たとえ影としてではあっても、何らかのかたちで、自己と向き合っているということが、同時に言われている。

次に、第二段階は洞窟の内部における人間の「解放」の段階である。解放された囚人は、光で目が眩み、直接見えるものが「何か」を答えることができず、前に見ていた「影」の方が「より隠れなきもの」だと言う。

つまり、囚人にとつては、「以前に見られたもの(つまり影)がより真なるもの *τὸ τε ἀπὸ αὐτῶν ἀληθές τε καὶ* (GA34,33) であり、非覆蔵的なものである。というのも、知が欠けていると、本来的に真なるもの、非覆蔵的なものへの関わり合いを持たないからである。また、彼らが非覆蔵性と思っているものと、非覆蔵性としての非覆蔵性との区別は自己を告知するが、その区別がまだできない状態であり、彼らは、固有な自己において人間を捉えることができず、自己へ関わることはできない。

それゆえ、以前に見られたものを影としては知らない囚人は、以前見ていたものと異なるものによって混乱が生じ、束縛へ戻ろうとする。その結果、束縛を解くことだけでは、解放には至らず、第二段階の解放は失敗に終わる。この段階での解放は、いわば非本来的な解放である。

さらに、第三段階は、囚人が強制的に洞窟の外に出される段階である。洞窟の内部で束縛を取り去ることではなく、洞窟から日の光への超登、つまり「太陽への超登」が、「本当の解放」である、ということがここでは述べられる。そして、この非覆蔵的なものへの移行は「強制的に」(GA34,42)生じるが、その結果、到達されたものが、「最も非覆蔵的なもの *τὸ ἀληθές τε καὶ*」(GA34,66)であるとハイデッガーは特徴付ける。⁶⁾

拘束の除去というような非拘束性としての自由は、本来的意味での自由を提供しない。本来的に自由になること

は、企投しつつ自己を拘束することであり、この自由が初めて存在者への関わりを可能にするのである。

また、ハイデッガーは、存在するものの非覆蔵性としての真理の本質を、人間がそれに基づいて実存する開蔵性の内に認める。人間とは何かということは、洞窟の内部では全く確定され得なかったが、強制によってはじめ、自己を問う状態へと置き入れられ、自己自身に目をむけることになる。それゆえ、この段階での解放は「本来的な解放」である。

最後に、第四段階は、囚人が再び洞窟内に戻る段階である。自由になった者は、存在するものの存在を理解して洞窟の内へと戻って来る。彼は、束縛されている者がなぜ影を影として認識できず、目の前に現れるものを存在するものと思い込んでいるかを知っている。そこで、自由になった者が洞窟に帰還することは、束縛されている者が、隠蔽によって心を奪われている状態に置かれていることを理解させるという意味を持つ。

その際の、自由になった者による囚人たちの導きは、言葉での対話によるのではなく (GA34,85)、強制的に彼らを洞窟の外へと引きずり出すという仕方である (GA34,85/86)。けれども、この強制行為は粗暴さではなく、解放者が先立って義務として自分自身に課した「思いやり Takt」 (GA34,81) である。

また、覆蔵を克服することは、覆蔵性に対する根源的な闘争、すなわち、常に覆いを取り去る闘争でもある。そして、ハイデッガーは、開蔵性としての真理を「橋 Brücke」として捉え、しかも、他方の岸に抗して一方の岸へ「橋を架けること Brückenschlagen」であると理解する (GA34,92)。つまり、第四段階で言われていることは、本来的に自由であることは、単に束縛から解放されていることではなく、暗さからの「解放者」になることである。洞窟への帰還は、他者をも隠れや暗さからの克服へと促すことになり、そうすることによって、自由を初めて本来的に完成することになるのである。

以上、束縛された人間の第一段階から、囚人が洞窟の外へと強制的に引き出される第三段階に移行するに従って

存在者の非覆蔵性の度合いは増す。そして、第四段階では、洞窟への帰還者による囚人の解放によって、覆蔵性の克服が試みられることになる。この移行は人間の本来性への上昇であり、固有な自己獲得、そしてさらに他者の自己獲得への促しの道であるということが、「洞窟の比喩」では述べられている。

第三章 覚悟性と良心

本章では、第二章で確認した「洞窟の比喩」解釈と、良心と真理ということとでわたしが意図している主題はどのようなに関わるかについて、第二章と対比しながら言及する。

第一節 非本来的真理と良心の呼び―第一段階、第二段階が意味するもの

i 現存在は、日常的にはひとというあり方によって支配され、配慮された世界や他者との共存在の中に埋没している。そこでは、「自己喪失 *Selbstverlorenheit*」(116)の状態であり、「私」の自己も、他者の自己も無く、また世界への本当の意味での関り合いもない。つまり、日常的には、現存在は、閉ざされた非本来性の自己の中にとらわれてしまい、自分自身には直面してはいない状態を生きているのである。

この点は、第一段階における洞窟の内部に束縛されている状態、つまり、囚人が、自己自身と、一緒に束縛されている他の者の影しか見ていないために、自分自身への関り合いを全く持たず、また「私自身や君自身を知ら」ず、むしろ、自分達の前にあるものに「とらわれている」(GA34,27)という状況に相当すると思われる。彼らは、自分たちに直接に出会われるものに没頭している(GA34,26)であり、ハイデッガーも、この段階の喩えが、「人間の日常的状态の喩えである」(GA34,28)と言っている。つまり、「日常性の尺度のみを持つためにまさに、人間は、こ

の状態をその奇妙さにおいて決して見ることができ」ず (GA34,28)、それゆえ、日常性の内で、ひととして存在している現存在は、その状態に疑問を感じることはないのである。

けれども、現存在がひとというあり方の内で、人と違わないように心がけている点からは、そこには自分と他者の間の「差異性、Abständigkeit」(126) がいつも潜んでいるという面も同時に見て取ることができる。つまり、囚人の状態が「奇妙なままであり、この人間自身が風変わりであるにしても、人間はこの状態においてもまた、既に非覆蔵的なものを持つ」(GA34,25) のであり、「洞窟の内でのこの奇妙な状態においてさえ、人間はいずれにせよ、自己に閉じ込められ、他のすべてのものから切り離された存在者でも、単なる自我でもなく、つまり真ナルモノへ方向付けられている」(GA34,25)。つまり、「気安められ、慣れ親しんだ世界内存在」(189) においては、自己と他者の相違が曖昧にされるが故に、自他のあり方も隠蔽され、偽装された状態であったとしても、現存在である限り、そこには何らかの目配せがあるということになる。

ii 日常的にひとというあり方の内で安らいでいる現存在が、ひとの中への頽落から自己を取り戻すこと、つまり、本来的な自己を見出すきっかけとして持ち出されるのが、「良心の声、*Stimme des Gewissens*」(268) である。

良心の呼びは、現存在をひとというあり方から取り戻し、本来的自己存在へと呼び覚ますものである。けれども、この呼び自体が本来性を意味するものではなく、良心の呼びは、気散じのうちに聴きのがされたり、通俗的な良心解釈のために、誤って理解される可能性もあり、必ずしも全ての者の耳に届くとは限らない。また、日常性における公開的親密さを打ち破ろうとする良心の呼び声は、「見知らぬ声」(277) として、自己をその「最も固有な存在可能」(277) へと呼び起こし、「被投的単独化の不気味さ」(280) の内へともたらし。このように、良心の声は平均的日常性とは異質のものであり、頽落したひとの立場からすれば、むしろ、その方が非本来的に見える。

これは、第二段階の洞窟の内部における、人間の「解放」の段階に対応していると思われる。この段階では、一

人の囚人が解放されて、洞窟の外へと向かうが、その囚人にとっては、「前に見られたものが、今示されたものより非覆蔵的」に思える。これは、「今示されたもの」が、彼らにとって異質で「不気味」なものだからである。それゆえ、「束縛を解かれた者は前の状態へ戻ろう」(GA34,35)とし、「この解放は失敗」(GA34,35)することになる。結局、彼らは、まだ「真なるものからあらゆる観点において遠ざかっており、世界の内での配視や自己自身への洞察を持つて」(GA34,36)おらず、「自己に関わろうとしていない」(GA34,36)のである。

この段階での真理性は、「前に見られたものが、今、示されたものより非覆蔵的だと思う」(GA34,31)ということであり、逆転してはいるが非覆蔵性は度合いと段階を持つていう認識は、ある意味において、ここでの人間の、より進んだあり方を示すと見ることができる。けれども、「人間自身が、そのうちで自由になる」時、つまり「自己自身へ至る」ときに、はじめて本当に解放される。それゆえ、第二段階で試みられた解放は失敗し、結局は第一段階へと戻る。そのため、この段階での良心の開示作用は不完全であり、真理性は、第一段階と本質的に変わらない。よって、第一段階と第二段階をまとめて非本来的真理の段階と言える。

第二節 ハイデッガーによる「洞窟の比喻」解釈の特異性

前節では、第一段階と第二段階について見てきた。けれども、実際にはプラトン自身は、この比喻において、いくつかの段階を明確な形で語っているわけではない。それゆえ、プラトン研究者によって、段階の区別は異なっている。しかし、ハイデッガーと同様に四段階を認めようとする説では、一般的には次のような区分がなされる。「洞窟の比喻」としては、514a2-517a6までの範囲となるが、ここでは、少なくとも真理認識の「段階」という視点からの段階区分を示している。

(i) 第一段階 (514a2-515c3)

(ii) 第二段階 (515c4-515e5)

(iii) 第三段階 (515e6-516b3)

(iv) 第四段階 (516b4-516e2)

一方、ハイデッガーの四段階の区分は次の通りである。

(i) 第一段階 (514a2-515c3)

(ii) 第二段階 (515c4-515e5)

(iii) 第三段階 (515e5-516e2)

(iv) 第四段階 (516e3-517a6)

第一段階と第二段階の区別については同じであるが、第三段階と第四段階の区別が異なっている点に注意されなければならない。例えば、アダムの区分は、

第一段階 洞窟内に縛られて、この内部の道具や彫像の影しか見ることのできない段階

第二段階 解放されて振り返ること、その影を投じる実物や火を見る段階

第三段階 洞窟の上の世界に上がって行き、上の世界の実物の影、反映を見る段階

第四段階 その実物および太陽そのものを見る段階

というものであり、この解釈が四段階説では一般的な立場であると言える。⁷⁾

ハイデッガーも従来のプラトン研究者も第一段階、第二段階については同様の解釈を与えていると思われる。しかし、プラトン研究者の通常の区分では、外界（叡智界）において影を見ることが第三段階として、さらに実物を見ることが第四段階として区分されているが、一方、ハイデッガーは、第三段階は外的世界への解放の段階と考えており、第二段階は、第一の非本来的な解放 (GA34, 65) であり、第三段階は、第二の本来的な解放 (GA34, 65)

であると位置づけている。

そして、特に注目すべき箇所は、第四段階である。従来のプラトン研究においては、この箇所をとりわけ實在、あるいは真理認識に関わる段階として区別することはなく、付屬的に、あるいは、別の主張点をもつ箇所として見られることが多い。例えば、藤沢令夫氏は、「洞窟の比喩」から、教育の理念、国家統治（政治）のあり方という二点が導かれることを述べている。⁸⁾ 教育の理念という点は、ここでは、人間における真理の獲得の観点として捉えることができるだろう。また、国家統治（政治）という点は、藤沢氏によると、「太陽を見た者」は、洞窟の外の明るい實在界に留まって、至福の生を送ることを許されず、もう一度暗い洞窟に降りて行き、洞窟内の統治の任にあたることを強制されるということを指摘している。教育の完成という点では、第三段階をもって終わり、第四段階は統治という別の観点を語ることになる。

実際、ハイデッガー自身も、この箇所について「真理と関係があるのか」とためらっており、「むしろそれは切り捨てられるべきではないか」とも問うている。しかしそうではあるけれども、「比喩の内で叙述された出来事は、第四の段階を持ち、しかもかなり注目すべき段階を持つている。登高は、さらにより高く登るのではなく、おそらく立ち帰るのだ」(GA34, 79)と述べ、以上に見てきたような、プラトン研究者たちの、帰還を真理認識として見なさない説とは異なり、帰還までを一貫して真理の視点においてのみ捉え、帰還こそが真理の最重要部分であり、ここで真理現象がはじめて真に完成すると考えるのである。この、第四段階の設定は、ハイデッガーの真理解釈として極めて独自であり、重要であるという点をここで強調しておきたい。

第三節 本来的真理と良心の呼び声―第三段階が意味するもの

第三段階では、本来的な解放が試みられることになり、「洞窟の内部で束縛を取り去ることではなく、洞窟から日

の光への超登」が「本当の解放」である (GA34, 41) とされる。その際、「非覆蔵的なものへの移行は強制的」 (GA34, 42) に起こるのであり、つまり、「解放は強制的なもの」 (GA34, 42) となる。太陽の下への登高は、「労苦と努力を要求し、苦勞と苦痛をもたら」 (GA34, 42) すものであり、それゆえ、本来的な解放は、「根氣と粘り強い氣構えとを必要」 (GA34, 43) としている。

これは、良心の呼び声特有の、「衝撃」と「中断させるゆり起こし」といった強制的な働きと結び付けて考えることができるだろう。ハイデッガーによると、良心の呼びには、「衝撃」、つまりひとの内での安らぎを中断しつつ、ひと自己から揺さぶり起こすという契機が存しており (271)、強制的に、ひと自己から本来的自己へと呼び起こす。その結果、ひと自己は、崩壊することになる。このようにして、良心は現存在の自己を、ひとの内への喪失性という慣れ親しんだ状況から引き離し、無意義さの内へ突き落とす。現存在は、ひとの内での居心地の良さを奪い取られることによって、自己自身へともたらされ、本来的自己へと呼び起こされることになるのである。

現存在は、呼びを理解することにより、「最も自己的な負い目存在」を引き受け、自己自身を「選び取る」 (287)。良心の呼び声は何も言わないが、しかし、実は積極的に、「負い目存在としての現存在の最根源的存在可能」を開示するのであり、こうして良心は、「最も自己的な存在可能」を「現存在自身のうちから」証するものとなる (288 / 295)。そして、現存在は、このように証しされた「本来的存在可能」の「実存疇的構造」 (295) としての「覚悟性 Entschlossenheit」 (297) へと至る。覚悟した現存在には、日常的世界が日常的世界としてあらわになり、そこに埋没していたときとは違った仕方で自己を理解するようになるのである。この点、「洞窟の比喩」においても、第三段階で到達されたものが「最も真なるもの」 (GA34, 43) であり、そこにおいてはじめて自己を問う状態へと置き入れられ、自己自身に目をむけることになる、ということとの関連が見て取られる。

「良心によって証しされた、際立った本来的開示性」としての「覚悟性」は、「沈黙し、不安への心構えをして、最

も自己的な負い目存在へと、自身を企投すること」(297)であり、現存在が *Da* として開示された本来的な姿にほかならない。そして、覚悟性は、現存在の開示性の「際立った一様態であり」、現存在の「最も根源的」「本来の真理」(297/299)である。それゆえ、「覚悟性によって、本来的であるがゆえに現存在の最も根源的な真理が獲得された」(297)ことになり、良心による覚悟性が、現存在の真理の開示の究極の場であるとハイデッガーは言うに至るのである。

しかし、真理の開示はただ自己理解の変様という段階で完結するものではない。次の第四段階では、真理の獲得についてさらに踏み込んだ発言がなされている。

第四節 他者へのかかわりと真理——第四段階が意味するもの

「覚悟性」は、ハイデッガーにおいては重要な役割を担っている。というのも、現存在は「自己自身への覚悟性」の内に立つことによって、「共に存在する他者たちを、彼らの最も自己的な存在可能において『存在』させ、同時にその存在可能を、率先して模範を示しつつ・自由にする顧慮 *die vorspringende-befreiende Fürsorge* において共に開示する可能性」(298)を獲得するからである。この点を理解するうえで、第四段階の議論は意義深い。第四段階で遂行されているのは、「引き返し」である。ハイデッガーは、この帰還を特に真理認識における最重要段階として、極めて重視する。それゆえ、帰還についてハイデッガーがどのように理解するかを考えることは、良心と真理に関する考察において示唆するところが大きい。

覚悟性という本来的な開示性は、平均的日常性における「『世界』の被発見性と他者たちが、共に、現に、存在していることの開示性とを等根源的に変様する」(297)ものである。しかし、この変様によって、「『世界』が『内容的に』別の世界になるのでもなければ、他者たちの範囲が取り替えられるのでもなく」(298)、それらは、その固有

な存在可能においてあらわれてくるということである。洞窟の外へと強制的に引き出され、太陽を見た者は、彼が既にいて、彼が熟知しているところ、ひとが支配している日常的世界へと帰還する。自由になった者は、存在に対する視を持って洞窟に帰還することによって、これまでとは異なったまなざしで世界を見ることになる。つまり、自己理解の変様が他者理解、世界理解の変様をもたらすことになるのである。

その結果、自由になった者は、洞窟に住んでいる者達、つまり、日常的世界に安らいでいる者達に、彼らが隠蔽によって心を奪われている状態であることを理解させようとする。つまり、覚悟した現存在は、他者達を彼らの最も自己的な存在可能の内に「存在」させ、その存在可能を、「率先して模範を示しつつ・自由にする顧慮」において共に開示する、という可能性の内にもたらされることになる(298)。この「率先して模範を示しつつ・自由にする顧慮」は、他者が「他者自らの関心」、すなわち他者自身の世界内存在に向かって自由になり、これを自覚するようになるべく「手助け」することである。そして、覚悟した現存在は、「率先して模範を示しつつ・自由にする顧慮」というかたちで、「他者たちの『良心』になりうる」(298)。「他者たちの『良心』」になるとは、他者の良心へと呼びかけ、他者をその平均的日常性への捕縛から解放し、自己固有の存在可能を透視しうる地平へと呼び起こすということである。

洞窟の中に帰還した者には、解放者として、洞窟の中にいる囚人に対する解放に際しての、強制への力が生じる(GA34, 81)。この強制行為によって、他者を太陽の光の下へと、「引き出す」(GA34, 81)のである。しかし、この強制行為は単なる粗暴さではなく、「思いやり Takt」、「解放者が先立って自分自身に義務づけた最高の厳格さが持つ思いやり、すなわち精神的な厳格さが持つ思いやり」(GA34, 82)である。それゆえ、ここでいう「強制」とは、他者に対して、強引に何らかの実存理念を押し付け、他者の自由を奪うことでは決していない。あくまでも、この「強制行為」は、思いやりからくる優しさを伴った他者への働きかけ、いわば「友の声」(163)としての呼びかけであ

る。覚悟した私が他者に呼びかけることにより、その他者はその声を「友の声」として聴き、それによって自分自身を開示することになる。このように、覚悟した私は、他者の開示作用に、「友の声」として携わる義務を負うことになるのである。⁽⁹⁾

そしてさらに、アレーテアは対決であるとハイデッガーは言う。人間の真の自由は、第三段階において到達された、「最も非覆蔵的なもの」に単に留まっていることにあるのではなく、むしろ、それは絶えず、覆い、すなわち非真理とかかわり、それらを常に克服することである。それゆえ、隠れたものの覆いを常にとることが行われなくてはならず、それは、覆いとの格闘の連続なのである。しかも、この引き剥がしは、「他方の岸に抗して、一方の岸へ橋を架けること」(GA34, 92) としてなされている。この、「抗して」ということはまさに、囚人を第一段階、第二段階の覆蔵性の状態から、第三段階の非覆蔵性の状態へと、強制的に「引き出す」ということである。つまりここで言われているのは、単に、非覆蔵性としての「一方の岸」と、覆蔵性としての「他方の岸」とがそれぞれ個別にあるということではなく、覚悟した私が、非覆蔵性に実践的にかかわり、真理の状態へともたらしということである。覚悟した私は、ひととして生きている他者に対して、良心として呼びかけることにより、他者の覆蔵性の覆いを取り去ろうと働きかけるが、この働きかけこそが、「橋を架ける」ということである。そして、この、「橋を架ける」ということに、ハイデッガーは最も根源的な真理性を見ており、ここで初めて真理現象が完成するのである。

覚悟性という本来的な開示性へと至ったのは、私を目覚めさせてくれる声を、私が聴いたことによるのであり、その私が今度は他者を目覚めさせるべく、他者へと呼びかける。このようにして、絶えず繰り返される解放としての、「率先して模範を示しつつ・自由にする顧慮」は、決して単に一方的なものではなく、自己と他者の相互性の最も基本的な前提として理解できるのである。⁽¹⁰⁾ このように、「率先して模範を示しつつ・自由にする顧慮」というかたちで「他者たちの『良心』になる」ということこそが真理の最も根源的なあり方であり、他者への「手助け」とい

う働きかけが、極めて積極的な意義を持つのである。

註

- ・本文中で括弧内の横転したアラビア数字は、すべて『存在と時間』(Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, 17. Aufl., Max Niemeyer Verlag, Tübingen, 1993.) の頁数である。それ以外のハイデッガーの著作からの引用については、原則として次の略記号と頁数を引用文の後に付す。

Bd34 *Vom Wesen der Wahrheit*, hrsg. von Hermann Mörchen, Gesamtausgabe Bd34., Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, 1988.

また、*Sein und Zeit* および *Vom Wesen der Wahrheit* の訳については、以下の訳本を参考にしつつ、必要に応じて変更を加えた。

桑木 務訳 『存在と時間(上)(中)(下)』 岩波文庫、一九九九年。

辻村 公一他訳 『有と時』 ハイデッガー全集第二巻、創文社、一九九七年。

細谷 貞雄訳 『存在と時間』 ちくま学芸文庫、一九九九年。

細川 亮一訳 『真理の本質について』 ハイデッガー全集第三四巻、創文社、二〇〇五年。

本文中の「私」は「現存在」の言いかえとして用いており、「わたし」は筆者自身のことを指す。

- (1) M. Theunissen, *Der Andere : Studien zur Sozialontologie der Gegenwart*, Berlin; New York, 1977, S.418, K.Löwith, *Das Individuum in der Rolle des Mitmenschen, Sämtliche Schriften* 1. *Mensch und Menschenwelt. Beiträge zur Anthropologie*, hrsg. von Klaus Stichweh und Marc B.de Launay, Stuttgart, 1981, S.79-82. (佐々木一義訳『人間存在

の倫理』、理想社、一九六七年。

(2) 安部浩氏は、「率先して模範を示しつつ・自由にする願慮」について、「私がこのように模範を示して見せたからといって、必ずしも他者が私を見習って彼自身の存在の自覚にいたるとは限らない。私はただ他者に彼の自覚を期待することができるだけ」であつて、「自覚を強いることは決してできない」と述べている（『現』／そのロゴスとエートス―ハイデガーへの応答―、晃洋書房、二〇〇二年、二一四ページ）。また、吉本浩和氏も、私が「覚悟性」に至ったからと言って、必ずしも私が「他者たちの『良心』」になるとは限らず、私にできるのは、私自身が範を示すことによって、他者が自らの力で覚悟性に至ることを「手助け」すること以上ではない、と述べている（『ハイデガーと現代の思惟の根本問題』、晃洋書房、二〇〇一年、九六―九七ページ）。両氏ともに、「率先して模範を示しつつ・自由にする願慮」の積極的働きについては言及していない。

(3) ここで言う他者論は、自己と他者の本来的な関係はどのようなものか、ということを用意している。一般に、『存在と時間』の内では自己と他者の関係が希薄であるといわれるが、徹底的に個別化された自己によって可能になるような、ハイデッガー独自の他者理解についての考察を指す。

(4) 鎌田学氏は、『存在と時間』における真理の概念』の中で、ハイデッガーの真理概念を三段階に分けて理解している。本稿でも、真理概念の分類について、鎌田氏の議論を参考にした（『存在と時間』における真理の概念、日本哲学会、『哲学』、第四九号、一九九七年、二八九―二九三ページ）。また、世界内部的存在者の「発見」については、『存在と時間』における真理の概念（日本哲学会、『哲学』、第四九号、一九九七年、八五―八六ページ）を参考にした。

(5) 渡辺明氏は、『存在と時間』における真理の概念』の中で、「洞窟の比喻」解釈が「徹頭徹尾存在了解の次元を動いている」とみなし、この講義を「存在と時間への問い」の内に位置づけることができると述べ、『存在と時間』における真理論を考察する上で、『真理の本質について』を用いて検討することは正当であるとの立場をとっている（『ハイデッガーとプラ

トン—二つの『洞窟の比喩』解釈から」、九州大学哲学研究会、『哲学年報』、第五三号、一九九四年、三一—三三ページ。

(6) プラトン自身はこのようには言っていない。

(7) J. Adam, *The Republic of Plato*, Vol2, edited with critical notes, commentary and appendices, James Adam (ed), Cambridge: At the University Press, 1902, pp.88-95, 156-163.

(8) 藤沢令夫『プラトンの哲学』、岩波新書、一九九八年、一三五—一三九ページ。

(9) 安部氏も、私が「他者たちの『良心』になることは、私が「友の声」として呼びかけ、他者がこの「友の声を聞くこと」により可能になると考えている（前掲書、二一五ページ）。また、壽卓三氏も「友の声」を「率先して模範を示しつつ・自由にする顧慮」を理解する上で重視している（「相互存在の存立地平—ハイデガー存在論の倫理学的意義—」、日本倫理学会、『倫理学年報』、第三三集、一九八四年、一一二—一一三ページ）。

(10) ここでいう相互性とは、レーヴィットやトイニッセンが前提にしているような市民社会的相互性ではなく、存在の地平を介して初めて理解し合えるような、ハイデガー特有の相互性である。彼の他者理解は、徹底的に個別化された自己から出発してはいるが、そのような本来的自己への立ち戻りを通じて初めて他者への「手助け」ということが可能になるのである。